むかしむかし

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第六十五号（一日発行）
平成七年二月一日

北海の鰊場 古平風土物語〈三一〉

親しい級友・海田綱市君 —三—

大正十四年・高等科二年　担任千葉信夫先生（九十歳）

高橋　源五

親しい級友海田綱市君

—余録—

海田綱市君は、高等科を卒業すると家業を継ぎ、美国町の本社にいた。後、昭和十五年ころになって本社に弟を置き、自分は余市町栄町に出て酪農を進めたのである。

大戦中は応召し、終戦後は生来のがんばりで、熱心に先進的な経営ぶりとその研究は〝後志の牛博士〟と異名をとるほどであった。

酪農や農業の各協同組合役員となって業界を刺激し、若い後継者グループづくりにも熱心であった。また、後志管内、北海道の酪農界の発展にも貢献し、幾多の実績を残したのである。

昭和七年七月に、急性胃癌の難病には勝てず、六十二歳を一期として急逝した。

彼の後継者である息子さんたちは、その後、彼の残した協和農場㈲で、酪農事業の構造総合改善計画を実現して意思を継いでいる。

私は、心から惜しむ人物として、彼を失ったことを悼むのである。

②化け物退治

「剣道達人」の海田君

高等一年の二学期に入った。学級担任の千葉信夫先生（札幌師範学校時代、剣道の選手であった）の特別の指導で、高等科の生徒に毎週二回、剣道指導をすることになり参加希望者を募った。

元気者の彼は、いの一番に参加した。ほかにも同級生が七、八人参加した。用具は、先生が町の警察署や在郷軍人分会から借り集め、竹刀は一本五十銭で各自が買って振り回したのである。

指導日の放課後の運動場は、かけ声、気合いでものものしく張り切った雰囲気であった。

やがてこれが教室に持ち込まれて、加わらなかった者たちも太い根曲がり竹や雑木の枝などで竹刀を作り、休み時間になると外に飛び出して、打ち振り合っていた。

元気であった故海田君、斉藤正己君、吉能政次君、それと今は故人となった高橋銀作君、宮本八郎君、本間三郎君たちは、なかなか気合いが入っていた。

「筋がいい」「上達が早い」などとほめられ、励まされていたが、誰もがまだ先生の太刀さばき、切り込み、体当たりにはとてもかなわず、ふっ飛ばされるだけで、一本も取ったことがなかった。

このように多くの生徒が剣道に熱中していたが、やがて季節は冬になり雪が積もって来た。

このころわが部落（旧・第九区部落会、現・栄町）の周辺で幽霊が出るとか、お化けを見たとかの噂が広まった。

アイヌの≪ことわざ 世間ばなし集≫から

■鰊交易のこと

鰊の交易（物品交換のこと）は米・酒のほかいろいろな小間物などであるが、すべて値段は米を基準にして割り出している。米八升（十二㌔）入一俵について外割鰊（ほかわり＝背割りにしたもの）六束（鰊にして千二百尾）の割合で交換する。

米一石（百五十㌔）の値段は金一両である。

白子と数の子は同じ値段で、米一俵についてそれぞれ三樽、笹目は六十樽である。一樽というのは二斗樽に山盛りにしたものである。

目切鰊というのがあって、これは干した時、束ねる時などに頭が切れたもののことをいうが、これは俵に詰める。

曹谷（宗谷）から松前までの弁財船の運賃は百石について金十六両であるが、乗組員には役職によって鰊を〝ほまち〟として与えた。

『せたかむい』投稿者のつどい

去る一月十六日、朝からの吹雪で大変寒い日でしたが、かねてから本間銀朔さんが企画されていて、いろいろこまめに連絡をとって下さって、ようやく実行の運びになりました。思いのほか楽しい会合になりうれしい限りです。

参加者は次のとおりでした。

（敬称略）

本間銀朔・福井幸平・石塚実竹内コト・池田テル・小野寺博大沢松蔵・北政道・村井芳男

会場は新地町の〝港ずし〟で会費は〇〇円、でしたが、それにしても会費の割りに次から次へと、卓上溢れんばかり？　のご馳走には驚かされました。加えて、竹内さんからは金粉入りの銘酒、池田さんからはチーズのおつまみなどなど……。

ちょうどおなかもすいてたのか、よく食べ、よくしゃべりました。

大沢さんのカムチャッカの話を皮切りに、石田先生（愛称カスペ）の話、梅村さん（正月のころになると神社のお札などをつくっていた方）、昔、古平には産婆さんが五人もいたとか、おもしろい話ばかりで、久しぶりにアゴをはずして、入れ歯が落ちそうになりました。放談は良きもの、精神衛生にも大変よろしい！

『せたかむい』もこの分だと、まだまだ話題が続きそうです。ふるさと古平町の外史・こぼれ話として、古い歴史、古い文化を今後も育ててゆかねば――と、思っています。

一同、また夏に再会することを約して宴を閉じました。参加して欲しかった小樽の高橋源吾さん、当地の渡辺ハツエさんのお顔が見えなかったのが淋しい限りでした。

ノモンハン五十年経し年賀かな

給水車よりの若水汲まれをり

菊展示夫唱婦随の宮大工

故郷を想う　福井幸平

随想

雪かき 9

渡辺ハツエ

連日、大雪が降り続いています。雪国に住む者の宿命と割り切って、毎日、心地よい汗を流しています。

家の回りの雪捨場には困っていませんが、こうも毎日の降雪では、除雪ダンプを押して行くと足が埋まってしまいます。そんな時に、私には助っ人『カンジキ』があります。カンジキを履いて、雪を踏み固めてからダンプで除雪すると仕事もはかどります。こんな便利なものを考案した先人たちの知恵に、ほんとうに敬意を表します。今でも元気で、カンジキを作っているおじいちゃんがいらっしゃると聞くと、雪国に住む私たちとしては何かしら心強いものを感じます。

昔は、雪かきといえば『ジョンバ』でした。各家庭で、それぞれ板で作ったものでした。木のみかん箱は、ジョンバの材料として重宝されていて、出来上がったジョンバには蝋（ろう）を塗って、雪の着かないように工夫していました。大工仕事の好きなわが家の主人は、使いやすいようにジョンバを考えて作り、私は永年それを愛用していました。

思えば、除雪ダンプが売り出されたのは三十年ほども前ではなかったでしょうか。そのころ主人は、それをいち早く買ってきました。私は「こんな物を買ってきて――」と、内心不満でした。何しろ当時のダンプは鉄製で重かったのです。しかし使ってみると、ダンプの威力に私は満足しましたが、いつの間にかそのダンプもいたんできて捨てられたようです。

今は、軽くて、滑りの良いダンプを使って、元気で雪かきのできる幸せに感謝しているこのごろです。

遥かなる故郷の思い出 5

橋　義春

三、あわびの話（二）

このアワビの禁漁区の監視員をしているのは、私の家から五軒先にある谷内さんのおじさんで、午前と午後の一回ずつ、まるで判で押したように丸山岬に廻って来る。

私たち悪童連が三番岩でたき火を囲んで、今日の獲物のアワビやガンゼを焼いていて、二番岩付近に谷内のおじさんの姿が見えると、「それっ」と、アワビと道具を隠してしまって、ガンゼだけを焼いているようなふりをする。

「どんだ、いいカマリ（匂い）するナ。アワンビ、めぇがったべ（旨かったか）」と、カマをかけてくる。

「おらだづ（おれたち）、あわびなンて採らねぇってば、ガンゼとヒル貝ばっかしだ。アワビだけ、なんも海の中にねぇってば――、見でケレ」

「うっそこげでァ、三番岩はアワビの禁漁区だべ、なんぼでもいるベサ」

「いねってば、したらオンツサン（おじさん）も海サ潜って、調べでみだら、どんだべ」

「俺サ泳げってが、潜ってみでアワビいだら、おめだづ、どうする？」

「そったらごど言わねで、ガンゼ焼げだから食ってケレ」

こんな調子で、谷内のおじさんと悪童連とで、丁丁発止（ちょうちょうはっし）のやりとりがある。

「さぁー、したら俺帰るが。おめだづ、アワビ採ったらわかねど（駄目だぞ）、こごは禁漁区だってごと、わがってるべな」と、一本くぎをさして、谷内のおじさんは帰って行く。

俺たち悪童連が、アワビを採っていることは百も承知の上でとぼけてくれる。

谷内のおじさんも子どものころは、俺たちと同じようなことをしていたのではなかろうか。

監視する方も、監視される方も、のどかな良き時代だった。

※（四ページ四段目より続く）当時の在校生に当たって、ようやく歌詞の一番を次のように書きとめくれました。

一、海のあちらの友だちの
誠の心のこもっている
かわいい　かわいい
お人形さん
あなたをみんなで
迎えます

私の見たにしん場風景 5

大正から昭和初期にかけて

竹内　コト

四、鰊つぶし

鰊が大漁したときなどは、後から後からと鰊が運び込まれて来て、鰊の山は減るどころか増えるばかりです。春のポカポカ陽気で下の方は腐り始め、魚粕に炊いても間に合いません。いくら人手があっても足りませんから、出面賃（でめんちん）も上がります。女の一日の出面は男の三分の一くらいのもので、朝の早くから夕方暗くなるまで働いても普通は三十～四十銭ですが、鰊大漁ともなるとぐんとはね上がり、出来高払いで一円四、五十銭も稼ぐ日があって、それこそ「鰊様様」でした。

廊下（鰊を入れる倉）は、明日の沖揚げに備えて空けておかなければなりませんから、手元が暗くなるまで仕事をしましたが、よくやったものです。

五、切り上げ

漁の無い年は、四月中にも切り上げをする所がありますが、漁が良ければ五月中旬ころには切り上げをして、後は何人かで残った仕事をします。

漁期中の賃金が貰えるので、待ちに待った日です。

船頭から炊き（かしき＝炊事夫）まで、親方から一人ずつ呼ばれて、仕事に応じて給金のほか、漁模様によって九一（くいち）と言われる歩合金や土産などを貰い、来年の契約をする人もいて、それぞれの故郷に帰って行きます。

ふるさとへの郷愁を残して
古平町佐渡人会の歴史に幕

北　政道

古平町には、明治の中ごろから、佐渡が島（新潟県）の出身者が多く来て永住し、漁業や商業を営んで、現在その子孫が後継者として広い分野で、古平町発展の中心となっている。

それらの人たちが、昭和三十年以降と思われるが『古平町佐渡人会』を結成して、親睦と交遊を図ってきた。

初代の会長は㊥斉藤林蔵さんで、会旗もあり、会員の親睦のため日帰り旅行なども行われ、当時の会員数は戸主を中心にして七十人と記録されている。年会費を集め、世話役がその労をとって運営されていた。旅行などは人気があり家族は誰でも参加できるので喜ばれていたという。昭和四十九年八月二十七日には、会長をはじめ四十七人が参加し、泊村の『もいわ荘』で慰安会が行われた。

その後、横川俊さんが二代目会長になられ、旅行は毎年のように行われていた。

さらに三代目会長に本間市太郎さんがなられたが、現在八十八歳で、なおご健在である。

私も、母が相川町の出身なので昭和五十五年に入会をさせてもらい、昭和五十七年十月五日に二十三人が参加して、余市町のニッカ工場を見学し、あゆみ荘で昼食をしたことがあった。ブドウ狩りは雨で中止になったが、不参加の会員にブドウを土産に買って来て配った。足の不自由なおばあさんを元気な人が背負ったりして、楽しく過ごした。また、昭和五十八年六月十五日には十八人が参加して、余市モイレ城閣で食事と入浴を楽しみ、スナップ写真を撮ったが時折取り出して見ては思い出している。

その後、高齢化に加え旅行参加者も減り、会員の減少もあって役員会に図り、ついに『佐渡人会』解散ということになってしまった。存続を望む声もあったが、高齢化の波と共に一つの歴史のある会が消えた。昭和六十三年二月現在で会員数は四十四人であった。会旗は今も本間市太郎さん宅に保管され、会の復活の日を静かに待っている。

ときどき佐渡に関係のある人が集まると、『佐渡人会』のことが話題になる。佐渡へ旅行された方方は話に花を咲かせ尽きることがない。歳月の流れを思い、先代のご苦労と、その子孫の佐渡への郷愁は消えることがない。

終わりになりましたが、この原稿を書くに当たっては、長く会計を担当され、旅行などの計画や実施にたずさわった宮森栄蔵さんから資料をお借りすることができました。厚くお礼を申し上げます。

【今日はこんな日】

青い目の人形の親善使節
古平小・沖小に贈られる
［昭和2年］

明治の中ころから二十年ほど日本に滞在していた一人の宣教師が、日米親善を願って、学校や団体に「日本の子どもたちへ人形を贈ろう」と呼びかけました。この反響は大きく、たちまち一万二千体余りの人形が集まり、昭和二年『人形使節』として日本に送られて来ました。この人形は、レースの下着に華やかな衣装で、寝かせると目をつぶって「ママー」と声を出すので、日本の子どもたちは目を見張ったそうです。

この人形は全国の小学校に贈られ、北海道に六百四十三体、うち古平町の二体は、古平小・沖小の両校に贈られました。

古平小学校では同年五月七日『お人形さんを迎える歌』を歌って盛大な歓迎式を行い、人形に“マーガレットイサベラ”と名づけました。この年、野口雨情作詞『青い目の人形』が国内で流行しました。

古平小学校で歌われた『お人形さんを迎える歌』を、吉野慶一郎さんが（三ページ下段）※